

別世界を見る眼* — E.M. フォースターの短編研究 —

作 田 真由子**

Abstract

It is said that what's most important and beautiful about E.M. Forster's stories lies in the poetic moment of epiphany. *The Other Side of the Hedge* is a very short story and is not so well-known as *The Road from Colonus* and *The Point of It*, but it also has a vision of another, ideal world. In this short essay, I would like to try to answer the question why the brother in this short story has a scythe from the viewpoint of the quality Forster endowed the half brother with in *The Longest Journey*, Forster's autobiographical long novel.

E.M. フォースターの作品は、「喜劇的、風刺的なヴィジョンと詩的、超自然的なヴィジョンの、いわゆる『ダブル・ヴィジョン』に依って支えられている」。そして詩的な啓示の瞬間こそ、フォースター文学の「最も重要、かつ美しいところ」^(注1) だと言われる。この啓示の瞬間は、短編『コロノスへの道』や『意味(わけ)』に端的に現れているし、長編の中にも、より複雑な形であるが、繰り返し重要な意味を持って現れてくる。主人公たちは現実世界に身をおいてはいるものの、時として別の世界を垣間見ることがある。啓示の瞬間を捉えることの出来る属性と対極にある人間の属性は、経年による鈍感さであったり、世俗性であったり、怠惰であったり、様々である。^(注2)

1904年に書かれた、『生垣の向こう側』(*The Other Side of the Hedge*)^(注3) という短編もまた、ファンタジーの形でこの啓示を描いていると言ってよいだろう。この小論では、このシンプルな構成の短編と自伝的要素の強い『いと長き旅路』の類似性を指摘することで、フォースターが「弟」という表象に託した理想を探ってみたい。

『生垣の向こう側』という短編のあらすじは以下のとおりである。

主人公は果てしなく続く、茶色い埃っぽい道を歩いている。他にもたくさんの人々が先を急いでいる。彼は疲れ果て、気持ちの良い風が吹いてくる生垣の向こうへもがき出ると、突然冷たい水に落ちる。それは生垣に沿って続いている、澄んだ水をたたえた濠であった。助けあげられた主人公は、そこが競争も進歩もない牧歌的な世界だと知る。茶色い埃の道を歩いていたはずの知人がこちらの世界でのんびりしているのを見かけたりもする。彼は親切な案内人が差し出す食べ物や飲み物を拒み、その世界に住むことを拒否してもとの世界へ帰ろうと試みるがなかなか果たせない。そのうち彼は、草刈り鎌とビールのようなものを持った男に出会い、たまらず飛びかってその飲み物を飲んでしまう。眠りに落ちる前にかれはその男が「1、2年前に置き去りにしてしまった」弟だと分かる。弟は彼をそっと寝かせてくれる。

*A Vision of Another World – A Note on E.M. Forster's Short Stories –

**Mayuko Sakuta

夢のような雰囲気を持ったこの作品は「茶色い埃っぽい道路」が象徴する「競争による進歩」や「有用」を第一の価値とする世界と、「柔らかな牧草地や澄んだ冷たい水、仲良く幸せそうに働く人々」が象徴する、自然と友愛の世界を対比させている。作品の最初の部分には「弟」に関して簡単な説明がある。

まず最初に頭に浮かんだのは、1、2年前にあの角を曲がった路端に置き去りにしなければならなかった弟のことである。そして自分も弟の二の舞になりそうだと思った。あの時の弟は、歌に夢中になって喉を痛めてしまっていたし、他人を助けることに体力を使い果たしてしまっていた。しかし私は弟よりもずっとうまく立ち回ってきた。

作家の創作の秘密は覗くべくも無いが、ひょっとしたら実際、現実世界に疲れた作家が、『心のふるさと』というべき場所へ帰った夢を見たのがこの作品を書いたきっかけかもしれない。そうすると、この「弟」は、彼の、理想郷に住む分身だとも考えられる。つまりこの短編は、過去に棄ててきた、もしくはしばらく忘れていた、望ましい自己の属性（芸術や友愛）と、もう一度新鮮な邂逅をしたという経験の寓話かもしれない。

しかし弟が持っている草刈り鎌（scythe）は何を象徴しているのだろうか。ビールのような液体はユートピアで人が飲む、ネクターのようなものと解釈できる。この世界では「歌っている者、喋っている者、庭の手入れをしている者、乾草作りやその他単純作業に従う者など、さまざまみな幸せそうであった」とあるので、弟がたまたま乾草を刈る仕事をしていたと考えるのが普通だろう。しかし深読みかもしれないが、この短編に素描されているこの「弟」の、さらに発展した姿を、『いと長き旅路』の中に見出せるような気がするのである。

1907年に書かれた『いと長き旅路』の作者の序文によると、「異母弟」の中心的テーマが最初に浮かんできたのが1904年であった。^(注4)「わたしの5つの小説のなかで一番人気はないが、自分としては書いたことを最も嬉しく思っている小説である」とフォスターは述べている。「本作のリッキーにフォスターはかなりストレートな形でみずからを仮託していることはたしかなようである。」^(注5)主人公リッキーに作者が自分を投影させているとすれば、大地そのものから生まれたような野生児で、父親の異なる弟のスティーヴンはフォスターの理想像の一つを担っていると言えよう。スティーヴンの父親ロバートは、リッキーの母親が惹かれた、素晴らしい手を持っていた。鋤による労働によって荒れた手である。この活力にあふれたロバートからスティーヴンは「太陽と風の刻印」^(注5)を受け継いでいた。リッキーは最初この弟を、異母弟だと誤解して嫌っていたが、実は異父弟だとわかる。そしてリッキーの死後、リッキーの愛した母親の命を一そしてある意味でリッキーの命をも一受け継ぎ、幼い自分の娘を育てることで紡いでいくのはスティーヴンである。スティーヴンはリッキーの理想の分身だとも言える。

『生垣の向こう側』に登場する「弟」は顔も定かではないが、やがて『いと長き旅路』の中に現れるスティーヴンの前身として、農作業や牧場に関係する草刈り鎌を持っているのだと考えられるのではないだろうか。

- (注1) 川西進「私たちにとってのフォースター」『特集 E.M. フォースター』(『ユリイカ』) 青土社、1992 年。
- (注2) 川西氏は、『いと長き旅路』における、啓示の瞬間と対比される概念に注目している。川西氏は、『いと長き旅路』では、フォースターは、この現実世界にいる人間を支配しているものを「経験」と呼んでいると指摘している。「この『経験』の作用が『いと長き旅路』では、1杯の紅茶にたとえられ『いのちの酒』と対比される。私たちは毎日『祈りのたび、友情のたび、愛するたびにその茶を飲んで』健全かつ有用な人間となり、そして一神にも人にも無用の者となる。とはいえこの世に生きている以上『それを飲まないわけにはいかない。飲まなければ死ぬ。でもいつも飲む必要は無い。そこに難しさがありまた救いがある。もう経験はご免だ。私が創造する、私が経験となる、といえる時が来る』」。同上、68 頁。
- (注3) E.M.Forster, *The New Collected Short Stories*, London: Guild Publishing, 1985.
- (注4) 近藤いね子編『フォースター』(20世紀英米文学案内20)(研究社、1967年)80頁。
- (注5) 高橋和久訳『果てしなき旅』(下)(岩波書店、1995年)解説より。
- (注6) 『果てしなき旅』(下)(岩波書店、1995年)、194頁。